

定置放牧によるリードカナリーグラス優占草地の有効活用

リードカナリーグラスが優占した混播草地においては、定置放牧を行うことによって、省力的に草地の適正な管理が可能であり有効活用できる。

農業研究センター 草地畜産研究所 (担当者 : 三角亮太)

研究のねらい

イネ科牧草の一つであるリードカナリーグラスは、地下茎によって面的に増殖し他の植生を被圧する、アルカロイドを含有するため放牧時の嗜好性が低い、冬枯れを起こす等の理由から、冬季放牧利用を妨げる要因となり混播草地としての維持管理が困難な状況となっている。加えて、イネ科であるため選択性除草剤による駆除が難しい。

当所では、多回刈りの継続と施肥の制限を組み合わせることによるリードカナリーグラスの抑圧効果を得ているが、労働力の面で課題が残った。そこで、定置放牧による省力的抑圧技術及び草地有効活用の検討を行った。

研究の成果

4月～10月まで繁殖牛3頭を1haの草地へ定置放牧した。

1. 草地乾物収量は、4月～6月まで増加を示すが、7月以降減少する。

1年目の総乾物収量は1,411.3kg/10a、2年目は1,380.5kg/10aであった(図1)。

2. 放牧牛の平均体重は、1年目95kg、2年目33kgの増加となった(表1)。

試験期間平均牧養力(1haに1頭の牛を放牧できる日数)は677.9CD/haで、九州高標高地帯(600m以上)における牧養力の目標の480～600CD/haを上回った。

3. 草地における栄養成分は、試験期間平均、可消化養分総量(TDN)58.9%、粗蛋白質含量(CP)19.5%であった(表2)。

4. リードカナリーグラスが草地を覆っている割合(被度)が、1年目45.6%、2年目60.5%低下した(表3)。

普及上の留意点

1. 本成果は、寒地型牧草地におけるものである。

2. 放牧後の草地には、雑草の侵入や裸地が見られるため、牧草の追播による植生の回復が必要となる。

3. 7月以降草量が低下するため、草量に応じた放牧頭数を調整しなければならない。

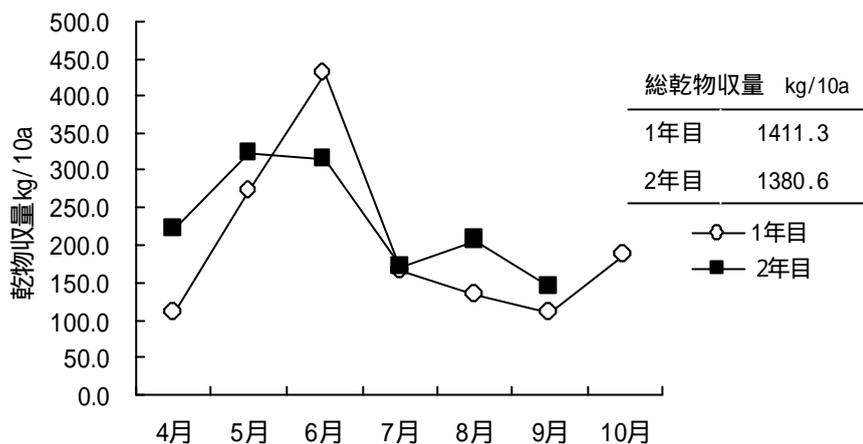


図1 草地乾物収量の推移

2年目は9月までのデータである。
リードカナリーグラス以外の草も含む。

表1 放牧牛の平均体重の推移 (kg)

	入牧時	退牧時	期間中の増減
1年目	548	643	+95
2年目	587	620	+33

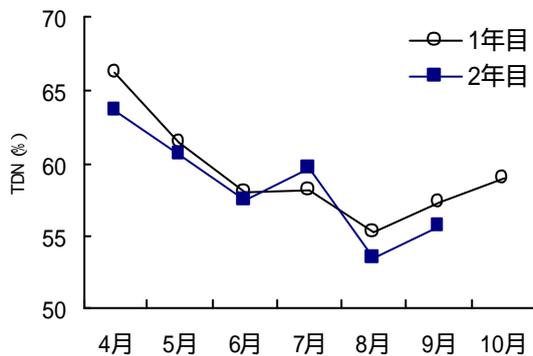


図2 TDN含量の推移

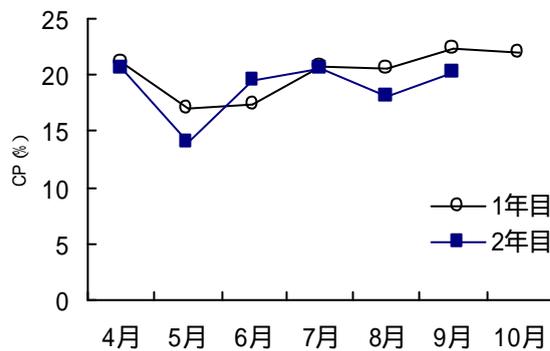


図3 CP含量の推移

表2 草地の平均栄養成分の推移

	TDN	CP
1年目	59.4	20.1
2年目	58.4	18.8
平均	58.9	19.5

表3 リードカナリーグラスの被度の推移 (%)

	入牧時	退牧時	低下割合
1年目	36.0	16.4	45.6
2年目	33.7	20.4	60.5